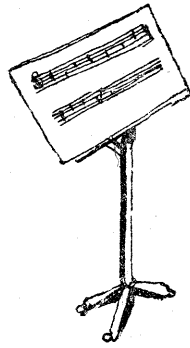


兼任園長覚書（児幼をとりまく環境について）



ところは浅草、といつてもいけば日本橋に近い問屋街、店の主人は年少の頃から苦勞して今日を築いた旦那衆、それだけ子どもの教育にはひどく熱心、その真中に建っている鉄筋コンクリート三階建の小学校の校舎である。

三十六教室のうち、小学校が三十四教室幼稚園は二教室——獨立で三つに区切る——と一小室とを使用している。小学校は義務だから学区は無条件入学、幼稚園は近くの小学校に併設してないから、応募者は二倍から三倍に達する。しかも学区は別

菊田要

に定っていないから、区内居住なら誰でも受けなければならない。小学校は四十二人の職員に対し幼稚園は五人、それも三十才以下の女の先生ばかり、毎年三月頃になると新入学童が増加のため、義務教育でない幼稚園は廃止したらという、至極ごもつともな意見も出ようという状態にある。

さてそうした条件のもとで小学校長兼幼稚園長の果す役割はかなりむずかしいものになってくる。公立の性格を堅持しながら運営していくには、いろいろな抵抗に堪えていかなければならない。

まず入園の公正を期することである。選考については、区内十二園が園長会の決定に基づいて全く同じやり方であるからいぶん気が楽であるが、実際の問題にぶつかると困難なことが沢山でてくる。もともといたたいけな幼児にテストしたり抽せんさせたりすることが、どうかと思われるが、どう考えてもこのほかに方法がない。いよいよ決定してはくれた子に泣き出されたりすると全く憂うつになってしまう。それも平常P・T・Aの会合などで顔なじみになつているお母さんが、憂愁につつまれて傍に立つておられでもすると、全く身の細る思いがする。

つぎは幼児教育の確立である。そんなことあたりまえといわれるかもしれないが、まだまだ旧い觀念がこつている。父兄には忙しい店の仕事の邪魔にならないように幼稚園に入れるという托児所風の考え方があるし、先生もお嬢さん仕事として嫁入前の小綺麗な職業だとの考え方から脱けきれない。絵を描かせ、歌をうたわせ、遊戯をさせておけばよいのではない。大学へ

も通じる一環の教育にむすびつく幼稚園教育でなければならぬ。幼児時代に培い伸ばさなければあとで取かえしのつかぬこともある。旧い觀念から脱皮して幼児教育を大道に載せなければならぬ。毎日の保育が行きあたりばつたりではならぬし、カリキュラムもうち建てなければならぬ。

その同じ建物内にあるだけ特に小学校との連絡を十分にとつて摩擦相剋のないようにしなければならぬし、むしろ進んで幼稚園と小学校の関連については具体的に研究を進める必要がある。

その上大切なことは、P・T・Aの総力を結果して十分に援助して呉れる体制を整えなければならぬ。それには前述の幼児教育本来のものを理解してもらい。お互いが有機的に結びあつてこそ強い支援が得られる。またそのためには幼稚園教育の実績も挙げなければならぬ。その実績を挙げるには、先生がのびのびと気持ちよく打込んで仕事ができる場を構成しなければならぬ。堂々めぐりらしくなつたが、それは兼任園長の責任がまことに重且つ大にな

つてくる。名儀上本務である小学校を立派に経営していくと同時に、幼稚園もうまく運営していかなくてはならない。この各々独立した二つを調和させていくことが第一の条件であり、なかなか困難な仕事である。

とはいつても、幼稚園の廊下へ一歩踏み入れば、喚声をあげて可愛いおかつぱ頭が腰のまわりにぶらさがると見ると、唯もう愉しく嬉しくなつてしまう。この間も歳末子ども会の折、お母さん達と共演でパライエティをやつて、お猿のかごやから落ちて尻餅をつくところを力演したら、あく日園長先生は怪我をしなかつたかしらと心配して話合つていたとのことである。

そういう純真無垢で感じ易いことも遠く対して、できるだけいい環境を作りあげてやりたいものだと思う。部屋を清潔にして綺麗に飾ることも大切だが、園全体をとりまく明かるくのびのびと自由な雰囲気こそ大切であろう。いつか見たNモデル幼稚園の建物が、色彩、形、採光等に十二分に気を配つてあるにかかわらず、肝心の建物全

体の感じがいかにもろいお粗末な感じはどうかと思つた。重厚さとか健全な心を養うには設備不完全でもまだうちの方がよいなあと思つた。ぜいたくといわれるかも知れないが、色彩、形、のほかに質というものも忘れてはならないことである。しかも建物の裏手へまわつたら階段の手すりのパイプがグラグラしていて、よく見るとコンクリートの固めがいい加減で工事者の非良心的なのに腹が立つた。体裁が多少悪くも幼児の生活場所だからガツチリと造るべきである。一年もたたぬうちにこんなことでは何だか立派に見える建物全体にもこうし

たのではないかとさえ感じられて不安に思つた。それから後にお茶の水女子大附属幼稚園を見て、旧式であり少し暗いが全体が落ちついていて重厚な感じは好ましく思われた。近代的な明かるさは人が作つて補つていけばよいだろう。京都の明倫幼稚園も旧い形式だが古都らしいしつとりとした落ち着いた感じが感じられた。そんなことをいうのも、結局幼い子どもほど直観的に身体で素直に

感じていくのであるから、その環境設定については慎重に十分考えていかななくてはならないことなのである。

あんまり色彩や形にばかりこって、安手な薄っぺらな感じも困るし、さりとて重厚な感じでも暗くてじめじめしているようでも困る。感じ易い子どもに与える精神的な影響を考えて、良い環境を与えてやりたいものだ。どうせ幼児だからという考え方をすてて、幼児だからこそなお重大に考えなければならぬのだという観点に立つことが大切である。

もちろんそこで営まれる職員と子どもとの精神的な生活が幼稚園の生活であろう。いいわるいの評価も建物や設備のみに対してでなく、本当はこの精神的なものに対してである。朝、ニコニコしてこども達が登園してくるようであればならないし、先生もニコニコと迎えて一日中楽しく過せるような幼稚園であることが理想でなければならない。

ここまでかくとどうやら自分の首をしめるような結果になってしまった。兼任とは

いえ園全体の責任者として果す役割は量よりも質的に大変なことだと思う。

こどもが環境によって思いがけないほどしっかりした行動をとるものであることについては次の例を挙げよう。

昨年の秋、都下K村にある学芸大農場へ園外保育を実施したときのこと。思い切った新しい試みをして見た。

- 一、附添は一切つかないこと
- 二、おやつは全部同じものを用意する。

(この費用三十円也)

まず父兄の代表者会議を開いてこの企画について詳細を説明した。一の理由としては親がついて来るとその引力の方が強い親の方も甘やかすからまるで〇〇家と××家の合同遠足になってしまい、園児としての集団的取あつかいがまるでできなくて、先生はその間に立ってまるで旅行家のようにあちこちと、走りまわり文字通り奔命に疲れて、しかも効果の挙がらぬ行事になってしまう。それに教育にはその場をつくることが大切で、集団の訓練は集団の中においてこそできるのである、自主的な生活対応

の訓練をするためにこの計画に協力願いたいと述べた。二の方は、おやつをどうも持たせ過ぎる傾向があるし、お互いに見栄をはっていいものを競うことにもなるし、誰もが同じ物を持っていくことはそれを救うことになる。母の会の人たちに選択して貰って袋につめて用意しておけば各家庭でも手数がはぶけるといふものである。何しろ始めてのことだから、最初は不安がってたお母さん方もどうやら了解して実施の段どりとなった。

ところが折も折、その申込みを受付けている最中に突発したのが相模湖事件であった。これは父兄に大きな衝撃を与えたに違いなかった。職員会議でいろいろ話し合った結果、それだからといって毎年遠足はやっているのだし、しかも教育効果の多い行事を止めるまでに、消極的になる必要はあるまいという結論で断乎実行したのである。

当日は約九割の参加者であった。天候にも恵まれたし、事故一つ起らなかったすべて計画通りに進められ、17頁に続く

る子供を「問題児」として重視したいと思う。よいにしろ、わるいにしろ、浮草のように流れている行動は、はっきり方向づけられたい。たわるさと同様に、否更にそれにもまして注意を要するものと思われる。

問題となる行動は、その子供にそなわっているものばかりではなく、その子供を囲む周囲の条件によって引起されているものであって、周囲の条件が変れば、行動自体に変化のある事は、指導事例を見れば明である。例えば事例4のKの行動の変化は、Kと組の子供との力のバランスがとれた時に、著しい。従って、問題児の問題は、教師の指導によって問題児と集団が好ましい噛み合せをした時に解消するものと思われる。こゝに集団を対象として指導する意味があるといつても、その子供の、その集団の成育状態によって、或時期には、個人指導に重点をおく事も云うまでもないことである。

更に細い事を附加すれば、集団の中で一人の子供に発表させたり、一人の子供を批判させたりする時には、必ず成功の見とおしを持って行わねばならない。みんなの前で発表しうまく出来なければ、却って自信よりも劣

等感を強めることとなり、批判によって萎縮してしまえば、更に、問題をこじらせることにもなる。

薬にも投薬の時期と分量があるように、指導にも、適切な時期と適量の刺戟とがある。やりなおしのきかない人間が対象である丈にささやかな経験をも生かして次の試みの指針としたいと希うものである。

(白金幼稚園)

28頁より 予定の時刻に帰園した。しかし何よりも嬉しく感銘したのはこども達の行動であった。休憩所へあがるのに靴を組毎にキチンと揃えた。室内でも組毎にまるく坐って、小さな膝の前におそろいのカバンとその上に帽子が重ねられてある。そして持って来たおやつをハンカチの上にならべて、どれから先に食べようかと品定めしている無心なこどもの姿をそこに見たのである。

いもほりに出かける途中坂みちですべてころんでも泣き出さない。しかも鼻の先まで泥をつけてもハンカチで拭いて笑ってすませるのである。いものうねごとに四人宛ならんで掘りなさいというまでチャンと待っている。欲ばってわれ先にと他人の分まで掘って

いくのとは大違いなのである。掘ったみずみずしい自分の脚ほどあるのを先生こんなに大きいのがといちいち見せに来るのである。持って来た手拭で作った袋に一ぱいつめるとあとは見むきもしない。みんな並んで手を洗うとお弁当を食べる。たべたあとは紙屑どころじやない、御飯粒まで一つ一つ拾ってきれいに片ずけるのである。こうしたことはこどもだけの集団であるからこそできるのだと思う。自主的に行動する場を与えたことがこうした立派な行為となってあらわれたのである。

帰ってから、迎えに出ていた父兄にこのことを報告したら涙をうかべてきている親もあつた。

この話はこれで終るが、帰りのバスの中で、半ば眠りこけながらも膝の上に載せたおいもの袋を、しっかり小さな両手で抱えている。可愛いい姿を、今でも思い出すのである。

(台東区立柳北小学校)